

政局混乱にスキヤンダル——コソボ

Ⅱ 独立宣言から3年、高揚感うせるⅡ

時事通信社・ベルリン支局長
東敬生

2008年にセルビアからの独立を宣言してから2月17日で3年を迎えたコソボがもがき苦しんでいる。産業は育たず、経済は低迷を続け、「欧州最貧国」のレッテルを張られたまま。一方、政局は混乱し、セルビアと戦火を交えた紛争当時のスキヤンダルまで浮上した。国際的な信用は失われつつあり、独立宣言の高揚感はずっかり消えうせている。

◇首相に臓器密売疑惑

「サチ首相は臓器密売に深く関わっていた」。2010年12月中旬、欧州の人権擁護機関、欧州会議が発

表した報告書で、コソボで権力基盤を固めつつあったサチ首相（42）に疑惑が持ち上がった。スイスの国会議員デイック・マーティ氏がまとめた報告書は、セルビアの治安部隊とコソボの武装組織が衝突した1998～1999年のコソボ紛争当時、武装組織のコソボ解放軍を率いていたサチ首相がセルビア人捕虜から臓器を摘出し、密売していたと指摘した。

解放軍による臓器密売疑惑は、旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷のデルボンテ元首席検事が2008年に回

顧録で明らかにし、マーティ氏はこの情報を基に調査を進めた。報告書によると、解放軍は紛争終結後、セルビア人やコソボの反対派住民を殺害。アルバニアで臓器を摘出し、移植を目的とした国際的な闇市場に流していた。手口は変わっているものの、臓器密売は現在も続いているという。欧州連合（EU）の治安支援部隊は昨年10月、臓器密売や組織犯罪、違法医療活動、職権乱用などの容疑で、医師や保健省の元高官ら5人を摘発したと発表している。

報告書は、サチ首相は解放軍の中



コソボ独立宣言時の、セイディウ大統領(右)とサチ首相(左)。
[写真/AFP=時事]

核を担った「ドレニツァ・グループ」のボスだったと断定。紛争後に欧米諸国がサチ首相への政治的・外交的支援を惜しまなかったため、同首相は「アンタッチャブル」な存在になっていったと分析した。また、政治指導者と犯罪組織の癒着ぶりは無視できない規模に達していたと強調し、

サチ首相が組織犯罪に加担していたとの見方を示した。報告書によれば、同首相はアルバニアのマフィアの支援も受けていたという。

これに対し、疑惑を次々と並べられたサチ首相は、記者団に「報告書は事実をねじ曲げている。コソボ独立と解放軍の評価を下げるのが報告書の狙いだ」とまくし立て、法的措置も辞さない考えを明らかにした。クラスニチ大統領代行も「解放軍の活動と(当時のユーゴスラビア連邦の)ミロシエビッチ大統領による虐殺を同列に並べている」と不満を表明した。また、コソボと緊密な関係にあり、臓器摘出の現場になったと指摘されたアルバニアのベリシヤ首相も「全く根拠のないデルポント氏の主張の繰り返しだ」と同調した。コソボ紛争では、セルビアはコソ

ボ住民に対する虐殺や追放、性的暴行を繰り返し、民族浄化を目指した。このため、「セルビアが加害者でコソボは被害者」というイメージが定着している。報告書の内容が事実なら、コソボも非人道的行為を働いていたことになり、従来の「常識」が覆る。特に、サチ首相はコソボの独立宣言の立役者で、紛争終結後から10年以上にわたり、コソボの政治の中心にいただけに、臓器密売で主導的な役割を果たしていたとされる報告は、世界に衝撃を与えた。EUスポークスマンは「真剣に受け止めている」と語り、調査を始める用意があると表明。コソボの暗部にメスが入られようとしている。

◇不正まみれの総選挙

コソボでは昨年12月中旬、独立宣言後、初めてとなる総選挙が行われ

た。総選挙ではサチ首相が率いるコソボ民主党が第1党となり、同首相の統投が固まった。報告書はその直後に発表され、サチ首相は勝利の喜びに水を差された。

ただ、総選挙でも、民主党としのぎを削つてきたコソボ民主同盟が「大規模な不正があった」と主張するなど、疑惑が浮上した。選挙では、サチ首相の地盤の選挙区の投票率は90%を超え、50%弱だった全土平均の2倍に達した。あまりに不自然な数字に選挙監視団も異議を唱え、問題視された選挙区で1月に投票がやり直された。

ところが、再選挙でも混乱ぶりを露呈した。旧ソ連や中・東欧の選挙監視団体の連合体ENEMOは、「選挙を通じて多くの不正があり、コソボの民主化プロセスに対する信用を

大きく傷つけた」との厳しい報告書を発表した。ENEMOによると、投票の秘密は守られず、監視団に対する脅しや圧力もあったという。

コソボ政府は、今回の総選挙を「民主的な独立国」の水準に到達していることを国際社会に示す機会にしたと考えだった。しかし、合格点には程遠く、かえって信用を失う結果になった。

今年後半に予定されていた総選挙が大幅に前倒しされたのは、民主党と連立政権を組んでいた民主同盟のセイディウ大統領が昨年9月に辞任したのがきっかけ。民主同盟の党首を務めていた同大統領は、憲法裁判所が「大統領職と政党党首の兼任は違憲」との判断を下したのを受け、自ら職を降りた。

民主党と民主同盟は後任の大統領

をめぐる対立。民主同盟が連立を離脱し、民主党が少数与党に転落したため、総選挙を早期に実施することになった。両党の対立は深刻で、激しい主導権争いを繰り広げている。国造りを託されている2大政党が政局に走る限り、安定は望むべくもない。

◇増えぬ承認国

コソボの独立を承認する国が一向に増えないのも悩みのタネだ。国際司法裁判所は昨年7月、コソボの独立宣言は「国際法に違反していない」との判断を示した。司法のお墨付きを得たことで、コソボでは承認国が飛躍的に増えるとの期待が高まった。しかし、国際司法裁判所の判断後、承認に踏み切ったのはホンジュラス、キリバスなど小国を中心とした5カ国だけで、合計でも74カ国にしか達し



EU加盟を目指し、周辺諸国との関係改善を模索するセルビア・タディッチ大統領。[写真/AFP=時事]

ていない。

セルビアや同国との関係が近いロシアに加え、EUの中でも国内に分離独立問題を抱えるスペインなどは、コソボ承認が自国の独立運動に火を付ける事態を招くのを恐れ、黙殺を続けている。コソボ外務省幹部は「〔臓器密売に関する欧州会議の報告

書が〕承認問題に影響を及ぼすだろう」と述べ、特にEU内の未承認国5カ国は当面、承認を見送るとの悲観的な観測を示した。

一方、セルビアは「コソボの独立宣言は絶対に認めない」との立場は堅持しつつも、こうしたコソボの相次ぐ失態に乗じた攻勢に出られないでいる。セルビア人が犠牲になった臓器密売疑惑の発覚後、「司法の場で真相を究明しなければならぬ」（リヤイチチ社会政策相）との厳しい批判の声を上げたものの、コソボとの融和の道は閉ざしていない。これは、セルビアがEUへの早期加盟を切望しているからにほかならない。EU側は加盟条件として、旧ユーゴ諸国との和解を突き付けており、セルビアは必死になって周辺諸国との関係改善を模索している。

タディッチ大統領は昨年7月、1995年にセルビア人武装勢力がイラム教徒約8000人を虐殺したボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァを訪れ、追悼式典に参列。犠牲者の冥福を祈った。また、11月には1991年にセルビア人武装勢力に包囲された揚げ句、壊滅したクロアチアのブコバルで慰霊碑に献花し、謝罪の言葉を口にした。いずれもEU加盟を視野に入れた外交活動の一環と目されている。

コソボとの間では昨年、対話開始の構想が浮上した。国際社会での存在感を高めたものの、政局に追われているコソボより、むしろセルビアの方が積極的。しかし、コソボの内政混乱で先延ばしが続いており、早期の実現を危ぶむ見方も出ている。

(あづまたかお)